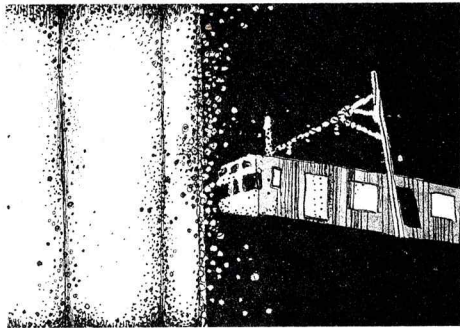


朝日 俳壇



「電車、前進IV」 岩尾恵都子

◆高山れおな選

- 満月を残して夏至の暮れゆけり
(埼玉県皆野町) 宮城和歌夫
- 逝く夏や廃墟の如く佇つ自由
(船橋市) 齊木 直哉
- ナイターのフライのふはりふはりかな
(安曇野市) 望月 信幸
- お早うの声のソプラノ梅雨兆す
(東京都大田区) 浅井 鈴子
- 変哲も無くて柏壁秋寂
(越谷市) 安厩院半樹
- 厨房に立つ火柱の涼しさよ
(香芝市) 土井 岳毅
- ☆蛍籠めく終電車並び過ぐ
(我孫子市) 藤崎 幸恵
- 梅雨空に思考してゐるカツカレー
(横浜市) 込宮 正一
- 「皇帝」の指揮者の額玉の汗
(仙台市) 安川 仁子
- 「コシを陶に三鳥喜美代を悼む梅雨
(倉敷市) 森川 忠信

【評】宮城さん。月の出は6時半過ぎだった。夏至と思えばいよいよ華やぐ。齊木さん。虚無感と自持と。望月さん。照明の中にちらつく球筋。一茶にくむさうな雪がふうはりふはり哉。十席。練馬区立美術館での回顧展開催中に91歳で逝去。

◆小林貴子選

- 人生は四コマ漫画の道
(諫早市) 篠崎 清明
- あぢさゐを支へる望のしなやかさ
(草津市) 井上 次雄
- 九十歳めでたし茅の輪くぐりけり
(調布市) 松村 定美
- 怪獣は一人暮らしや豆ご飯
(神戸市) 倉本 勉
- ☆蛍籠めく終電車並び過ぐ
(我孫子市) 藤崎 幸恵
- 飛魚の一身比首のことごとくも
(羽咋市) 北野みや子
- 箱裏のスカートふはり夏兆す
(四日市市) 平井 章子
- 打ち捨てし食えぬ野菜になめくじら
(岸和田市) 小林 凜
- 彷徨の傘重りゆく我鬼忌かな
(岡山市) 小池 沙知
- 生節のでかいの持たす母が好き
(西東京市) 濱田 朝子

【評】一句目、蟻のように営々と暮らし、起承転結の結でにっこりと。二句目、茎が長く伸びるタイプの紫陽花。三句目、「何がめでたい」というが、やはりめでたい。四句目、家庭は持たない？ 五句目、都会を走る列車を抒情的に捉えた。

◆長谷川權選

- 想ひ出は香水の香と共に消ゆ
(東京都世田谷区) 塩田 泰之
- あめんぼや命の軽き水の星
(津市) 櫻木 博文
- 出目金の溺れかけてはまた浮かぶ
(伊万里市) 萩原 豊彦
- 一匹の世界となりし金魚かな
(北名古屋市) 月城 龍二
- 木下蘭一片の闇黒揚羽
(交野市) 遠藤 昭
- アウトリガーカヌーは真つ赤晴子の忌
(横浜市) 正谷 民夫
- 医者通ひ命を守る日傘かな
(新庄市) 三浦 大三
- 病める身の形代へ吹く風深し
(高山市) 大下 雅子
- わたくしはこのままでいいねぢね
(各務原市) 市橋 正俊
- 角出さずじつと一日蝸牛
(国分寺市) 石川 春子

【評】一席。香りとともに現れる面影。「失われた時」のように。二席。命の重さを知っているはずの国の所業。たとえばガザも。三席。何とも泳ぎが下手そう。あつぷあつぷと魚なのに。十句目。そんな日もたまにいいもの。人間もまた。

◆大串 草選

- 夏座敷母の板と眼りけり
(大村市) 小谷 一夫
- 隠沼を見つけて浮かぶ梅雨の月
(仙台市) 柿坂 伸子
- カウンター店主も客もアロハシャッ
(東京都板橋区) 竹内宗一郎
- 惜命の清水ごとく呑むばかり
(北本市) 萩原 行博
- 農を継ぐ覚悟の草を刈りにけり
(岐阜市) 花川 和久
- 泳がねは沈むほかなき海月かな
(いわき市) 馬目 空
- 万緑の一村すでに生家なし
(名古屋市中) 平田 秀
- 新しき無人駅舎につばめの子
(今治市) 横田青天子
- 帰省子とくぐる暖簾の懐かしや
(茨城県河内町) 吉村 巖
- 東京に小さき登りや白日傘
(塩尻市) 古殿 林生

【評】第1句。逝去した母と共に過ごした一夜。一生忘れない。第2句。「隠沼」を見つけて」が良い。隠沼は「草などにおおわれて外から見えない沼」(広辞苑)。第3句。「店主も客も」和氣満々。「アロハ」はハワイ語で「ようこそ」など。

短歌時評 社会的かつ文学的

小島 なお

社会的であること、文学的であること。現代短歌では両輪の力が求められている。社会的テーマを詠つことは、時代の実感や苦しみに光を当てるという点において意義がある。けれど、社会的であることと文学的であることは本来分けて考えなければならぬ。

『Dance with the invisibles』 陸月都

西陽

「富める人」は、新約聖書ルカ伝のたとえ話を下敷きにして、ひとりひとりが

「ならざる」者となり、連帯すらできない時代の閉塞感を示唆する。三句目では、玉音放送に突如として「僕」の声が入り込む。戦争を知る世代がいなくなり、空想の戦前を生きた私たちがはまるで遅くに生まれてくる子供のようなとも。

社会的であるという点のみで短歌は評価されるべきではない。社会的なテーマを、比喻によって描写によって韻律によって文体によって文学に昇華してはじめて優れた作品と言える。人々の生き方が多様化し、テーマ偏重の傾向が高まってゆくなかで、短歌が文学であるという初心にくりかえし立ち返りたい。(歌人)

第44回現代俳句評論賞 現代俳句協会主催。東京都在住で「炎環」同人の田辺みのるさん(60)の『萩の季語「蟬」一加藤萩の「生や死や有や無や蟬が充滿す」の句を中心とした考察』に決まった。宮坂静生編著「俳句表現 作者と風土・地貌を楽しむ」俳句は底流に風土との関わりがあるとの自説を詳述。(平凡社・2970円)

風信

☆は共選作。入選作はデジタル版にも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300・短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できます